

# 瀬戸のかじこ

来栖良夫

## 光男はなぜかじこになったか

瀬戸内海の忍島は、ぐるりがわずか4キロという小島でした。ここは山口県にはいますが、それより四国の愛媛県や広島県にちかく、いつも、ひっそりとしずまりかえていました。

1944年（昭和19年）の12月に、アメリカ空軍の東京大空襲がありました。また、地震やつなみがおこって、1000人あまりの人が死にました。そのころです。目を大きくあけた、やせた子どもと足にゲートルをまき、地下たびをはいて戦闘帽をかぶった男が、忍島の船つき場におりてきました。

島の道は、石段のようなのぼり坂ばかりでした。りょうがわには、石をつみかさねてかこいをした漁師の家がありました。屋ひなかの忍島は、はたらけないとしよりと、はだかの子どもばかりでしたから、ものおとひとつたてていません。

「あれ、なんじゃとよ。」

「ふん、またかじこがきおったんよ。」

石垣のおくから、おばあさんと子どものこえがきこえてきました。

石原光男は13になっていました。おとうさんとふたりでくらしていましたが、おとうさんは徴用にとられて兵器工場へはいました。ひとりぼっちの光男は学校へいく気にもなれませんでした。ある日、光男は下関から汽車にのりました。汽車のついたところは大阪でした。空襲警報が出ていて、まっくらい夜でした。すると、どこへいくあてもない家出少年のそばへ、

「おい、あんちゃん。おなかすいてんのやろ。」

といいながら、よりそってきた男があります。

「さあ、たべな。ギンめしのおにぎりや。」

男は、白米のにぎりめしをくれました。

「家出をしてきたんか。わかっるとる、わかっるとる。そやけどな、そないうろうろしとって、おまわりにつかまって、感化院というところへぶちこまれてみい。一生そこを出られんようになるで。それよか、わしがええとこせわしてやるよって、そこではたらかんかい。さかなも、いもも、くいほうだいや。」

どこへいっても、ろくろくたべるものもない戦争のまっさいちゅうでした。いもや、さかなが腹いっぱいたべられるときいて、ほんとうにうれしくなりました。男といっしょに、汽車にのり、バスにのり、船にのって、忍島へついた光男は、ここの漁師の家にやとわれました。

ひっそりとした忍島も、夜のあけがたはさわがしくなりました。58戸の漁師の家では、きょうそうで小舟を出すのでした。

忍島の沖あいには、瀬戸内海でももっとも小島のおおいところですよ。人のすめない、みどりの島が、青いぬのをしたような海の上にかさなりあつてうかぶさまは、まるで絵のようでした。しかし、舟をこぎだしてみると、小島のあいだをながれる潮のうずまきは、きみのわるいほどでした。漁師たちは、そのながれにのって、ふかい海のそこへつり糸をたれ、タイをつりました。忍島の舟、山口、広島、愛媛などからきた舟が、いりみだれていました。どの舟も、のりこんでいる漁師はたったひとりでした。そうして、1日じゅう、つり糸をあげたり、さげたりしながらは

たらいています。むかしながらの「1本づり」というやりかたでした。

舟はひっきりなしに、潮にながされます。また、潮のながれのかわるたびに、舟のぼしよをかえなければ、タイはつれません。そこでどの舟にも、やすみなしにろをこぎつづける、かじこ（梶子・舵子）をのせていました。

その日の漁のでき、ふできは、かじこのはたらきひとつできまる、といわれるほどでした。そのかわり、かじこは1日じゅう、うでをやすめることができません。親方（やといぬし）の顔色ひとつで、すばやく、ありったけのちからでろをおし、タイのあつまるところへ、舟をもっていかなければなりません。

かじこは、12、3から、17、8ぐらいまでのしょうねんばかりでした。石原光男のようにはじめてろをにぎるものは、ゆだんをすればたちまち親方の青竹になぐりつけられました。

「1人まえのかじこになるにや、6年はかかる。たたかれるほど、しごとをはやくおぼえるぞな。」

親方はつり糸をにらんでつぶやきます。

朝のくらいうちから海へ出て、ろをおしつづけ、つり糸がみえなくなってから浜へもどれば、舟あらいをし、家へかえっても、親方やおかみさんのよこれもの、あかんぼうのおむつのせんたくと、しごとはきりもなくつづきました。それから犬のように土間でごはんをたべ、土間のすみへよこになるのでした。この島では、イワシがお米のかわりでした。舟でたべるひるめしは、黒い麦のおにぎりふたつでした。

ある夜、光男は親方にたのみました。

「おれには、このしごとはつとまりません。どうか下関へかえしてください。」

親方は、だまってキセルをはたいていました。おかみさんがはきだすようにいいました。

「こじきやろう！ かえりたけりや、はだかでかえれ。もう、めしはくわせん。」

イワシのごはんはとりあげられてしまいました。むつつりとタバコをすっていた親方が、いきなり土間へおりてきて、キセルで光男の顔をなぐりました。

「かえらん、かえらん！ かんになしてください！」

光男は頭をかかえてなきだしました。

「ようし、そんならめしをくえ！」

「親方、おれ、イワシばかりくってるので、おなかがいたくて、がまんできんのじゃ。」

「船へのって、ろをおしてりや、はらいたなぞけろりとなおるぞな。」

親方は、あくびをしながら、ねどこへもぐりこみました。

## 正美はなぜかじこになったのか

忍島はまずしい土地です。

島の58戸の家には、電燈も、新聞も、ラジオも、時計もありませんでした。母島から医者がかかるのは、だれかが死んだときだけでした。小学校と、生徒が8人だけの中学の分校がありましたが、そこはかじこよりつくところではありませんでした。

ちかくの島にすこしばかりの畑もありました。タイの季節がおわると、イワシとりもしました。しかし、なんといっても忍島の人たちの生きる道はタイの1本づりです。そのためにはどうしてもかじこがいりようでした。そうはいっても、だれがこんなしごとをよろこぶでしょう。わかいものは島を出て、もつとはたらきがいのあるしごとをえらびます。まともに人をやとうちからの

ない1本づりの漁師たちは、よそのまずしい土地から子どもをいれて、かじこにするようになりました。こういうならわしのはじまるのは、江戸時代のすえのころからだといわれています。

石原光男のようにだまされてきたものもいました。戦闘帽の男と親方が、どんなとりきめをしたのか、光男は知りません。1年たちましたが、親方は1銭の給料もはらおうとはしませんでした。

光男がきたころ、忍島には30人ほどのかじこがいました。あらましは、愛媛県のまずしい村から売られてきた子どもたちでした。ところが、太平洋戦争がおわると、島のかじこは、60人にふえました。

戦争で家をやかれ、親兄弟とわかれわかれになったもの、家族が死んでしまったものなど、ねるところもなく、たべさしてももらえない戦災孤児や、浮浪児がふえたためでした。周旋屋はそれに目をつけました。

「腹いっぱいたべさせてやるで。」

と子どもたちをだまし島へつれこみました。感化院や孤児院からも子どもをもらいさげてきました。

「周旋屋に手数料をとられるのはばかくさい。」

と自分でさがしにでかける親方もありました。そして、

「ええ、こいつを、わしが家へつれていきまして、真人間にしてやろうとおもいますが、いかなものでありましようか。」

とわざわざ警察へことわったりしました。感化院や警察では、

「浮浪児はふえるわ、予算はないわで、よわつりました。こりゃ、大たすかりですわ。」

とでもいったのでしょうか。とにかく、かじこはどんどんふえていきました。

瀬戸内海の夕ぐれはうつくしく、空も海もまっかにぞまりました。まるでおとぎばなしの国へきたようでした。しかし、島にあがれば、くもの巣へかかった虫とおなじでした。人のちからでは、沖のうず潮をおよぎきつてにげることむりでした。しごとがおわれれば、親方が、船にがちゃんど錠をおろしてしまうのです。

島の人のなかには、つらいかじこの年期をつとめあげて、1本づりの漁師になったものもいました。そんな親方をもったかじこは、せめてものしあわせというほかありません。ごはんもぎしきでたべられました。しかし、そんな人でさえ、かじこどうしが、したくするときげんをわらくするのでした。そこで、石原光男などは、家の人がねむってしまうのをみてから、さっとぬけだして、友だちとあうことにしていました。それもひと月に1どか2どのはなしでした。

石原光男と村田正美と伊藤三郎が、しめしあわせて、みじかい夜をかたりあかすところは、分教場のちかくの岩のかげでした。波が足もとまでやってきました。

村田正美は愛媛県からきた、ことし11のおとなしい子でした。おなじとしごろの島の子どもが、

「おい、おまえ、どうしてかじこになったん？」

といったとき、正美はこんなふうにこたえました。

「親がようやしなわんけ。子どもがようけおって、うちら、めしようくわせてもらえんけ。」

いつかもこの岩かげへ3人があつまって、

「おれは船のりになりたい。大きな船のよ。」

「おれは鉄道員になりたいや。」

としゃべりあったとき、正美は、

「うらあ（おれは）かじこでええ。」

といました。光男と三郎はおどろきました。すると正美は、

「うらあ耳がとおいけん。それに年期がのこつとるし、ほかへはいけんもの。」

といてうつつむきました。

愛媛県の、村田正美の浜べの家へ、周旋屋がきたときでした。正美は、

「とうちゃん、うらあなんでもするけん、かじこにはなりとうない。」

といました。おかあさんも、

「のう、かじこのはなしはまたにしてつかあせ。これがいやだというだでのう。」

とことわりました。周旋屋は、まずしい親の心をちゃんとみぬいていましたから、その日はそのままひきあげ、あくる日、またやってきました。

「5年の年期で2500円というのは、わるくないがのう。きよ年わしがせわしたときや、5年で2000円じゃった。かじこ、かじこというけれど、しんぼうしてつとめりや、船をもらって一本だちもできるやないかい。」

「それもそうじゃのう。うちの子は耳がわるいけん、いっそ、かじこのほうがええかもしれん。」

「まったくよう。なに、むすこをくれてやるわけやなし、病気をすりや、むこうがめんどうをみる。あとでかねがிரりようになりや、年期をのばしゃええ。子どもが親のくらしをたすけるのはあたりまえ。むすこじゃって、ここにおつておなかつかしておるより、なんぼええかしれん。家のもんは口べらしになるしのう。日本は戦争にまけたよつて、もうろくなことになりやせんわ。こんなときに、2500円がころがりこもうというのやないかい。」

「島へいきや、おまえも満腹、家のものも満腹。」

とおかあさんが子どもの顔を見ました。

正美はこっくりしました。

「そんなら、うらあ島へいくけん。」

## 三郎はなぜかじこになったか

村田正美は、忍島のかじこになりましたが、すこしも満腹はしませんでした。

「おまえ、腹がひもじいかい。」

と石原光男がたずねました。

「いつもひもじい。」

「親方がな、つったイワシのほねをさつとごいて、海へつけて、なまのままたべおつた。おめえもくつてみい、つて親方がいうから、おれもくつた、あまかつたよ。」

「親方がええいわにや、1びきもくわれん。きようは、うちらイワシを2俵もとつたのに、くわしてくれなんだ。」

「正美よ、そんなときは、かつばらいでもなんでもせいや。」

ねそべっていた伊藤三郎がいました。

三郎は、3人のなかでは1ばんとし上の16歳でした。顔のはんぶんにはケロイドがありました。ピカドンにやられたのだと三郎はいいました。

広島をやけだされ、みなしごになった三郎は、かつばらい、モクひろい、こじき、なんでもし

て生きてきました。そうして、おまわりさんにつかまって、感化院にいれられ、それから忍島へもらわれてきたのでした。

「感化院はよかったなあ。グリコでもチューインガムでも、なんでもかっぱらいができたが、この島にはぬすむものもないや。」

三郎は、ふところから、だいじにしているハーモニカをだしました。ふるぼけた、ちいさいハーモニカでした。島へくる日、感化院の小使いさんが、

「うちの死んだ子がふいとったもんじゃけん、おめえにやるわな。島へいったらふいてあそべ。そうして、ようはたらいて、りっぱな漁師になるんじゃぞ。」

といいながら、ポケットへおしこんでくれたものでした。

三郎たち浮浪児なかまが、この島へきたとき、親方やおかみさんらは、  
「こんどはふつうの子じゃないけん。ぬすつとを家にかつとるようなもんじゃのう。」  
と大きなこえでいいました。島の人たちは、かじこを人間のなかまとおもいませんでした。それで、当人の目のまえで、なんでもあけすけにしゃべるのでした。

「あいつら、うちのもんへ手を出すかのう？」

「おお、だす、だす。みたもんをとるんじゃ。気をつけいよ。」

「感化院ちゅうたら、子どもの刑務所じゃけ。あいつら、くさいめしばかりくうとったのかや？」

「きまつとるわな。ようけくやろ。腹いっぱいくわせるとくせになるけ、くわせんほうがええぞ。」

「あっはっはっ、それでもただじゃけ、まあ、やすくついたぞな。」

11から19歳までの、60人のかじこは、朝はくらしいちにおきてかまどをたきつけ、すこしでも人よりさきに船をだそうとはたらきました。1日じゅうろをおしつづけ、いつもおどおどして、親方やおかみさんの顔色ばかりみていました。村からきた子どものほかは、かえるところもないせいか、そんなかじこはひどくおとなしく、そうしてうすぼんやりしていました。とにかく、かじこたちのいちばんつらいことといえば、まい日のたべものがすくないことでした。親方は、気にいらないと、すぐ、

「めしをくうな。」

と、たべものをとりあげる罰をくらわせました。これがこたえました。

1948年（昭和23年）の春、石原光男は夜中に目をさましました。ふえをふくようなほそいおとがきこえてきました。雨戸のすきまから月のひかりがもれていました。耳をすましていると、それはふえのおとではなくて、まちがいない人のこえでした。

「出してくださいよう！もうたべません。だしてください！親方、おかみさん！」

光男はいっぺんにさむけだち、雨戸へからだをすりよせて、となりの家のかじこの声をききとろうとしました。光男はかぞえどし17になっていました。いまでは1人まえのかじこでした。なぐられなくても、タイやイワシのむれをおって舟をあやつるようになりました。けれども、腹八分めにたべさせてもらい、土間でねむるだけの少年労働者であることには、すこしもかわりがありませんでした。

となりの家のかじこ佐々木民治は、感化院からきた13の少年です。かわいらしい子どものくせに、ぬすみが大すきでした。民治は、ぬすんだものを友だちにわけてやることも大すきでした。かじこになってからは、よくぬすみぐいをして親方になぐられましたが、ここ4、5日というものの、石段の道や浜へすがたをみせていませんでした。光男は、親方とおかみさんが、こんなはな

しをするのを耳にしました。

「となりのぬすつとは、腹がひもじいというて、夜中にぼろをかみながらすわつとったりするとよ。」

「このせつのかじこは、いくじがないのう。」

「それで、なにをくったんかしらんが、えらくくだしてのう。それでも土間のなかをはいまわつてさがすで、手がつけれんらしい。」

「ふうん、いくらかじこでも、いっぺんぐらい医者にみせとかんと、死んだらこまるで。せわのやけるぬすつとじゃい。」

## なぜかじこのことが知れわたったか

佐々木民治はダンペーにおしこめられてしまいました。ダンペーは、タイのえさにするクロイカを、生かしたままいれておく箱です。

これで、ぬすみぐいはできなくなりましたが、箱のなかで大小便をするので、家のなかがかくさくてやりきれません。親方は、民治をいれたダンペーを、庭さきの小便つぼの上へはこび、

「ここなら、いくらたれながしてもええわ。腹くだりのなおるまで、そうしておれや。」  
といいました。

ふえのようなこえは、となりの家の庭さきからきこえていたのです。石原光男はその夜はねむれませんでした。あくる日の夜も、雨戸へ耳をおしつけていました。民治は、もう、出してください、とはいわなくなりました。

「なにかください。なにかください。」

そういうだけでした。

光男はおもてへぬけだし、どろぼうのように、となり家とのさかいの石垣をのりこえました。まっ黒いダンペーが月の下でひかっています。そのあたりは、むかむかとはきけがするほどくさくて、そばへもよれぬほどでした。

光男は、はなをつまみ、息をこらして、

「民治、民治！腹がひもじいのか。」

と、ささやきかけました。錠のかかったダンペーの中の、罰をうけたかじこのすがたはみえませんが、くさいのをがまんして耳をおしつけると、民治は、せいぜいとのどをならしながら、

「なにかください。なにかください。」

とうめきつづけていますが、それをどうすることもできません。光男はもういちど石垣をのりこえました。

このうわさをきいた島の人たちはおどろきましたが、

「なんぼぬすみぐいをするというても、ダンペーにいれるのは、ちいとむごいわい。」

「そんじゃけ、みんな漁に出てしもうて、家にだれもおらんなら、しかたないけん。」

「はあて、嫁ごも1日おらんのけえ。」

「がきをつれて畑じゃ。うちらとおなじよ。」

「まあ、ちつとはせっかんせんことにゃ、かじこもようならんが、手のかかるもんじゃ。」

「やっばあ、かねはろうて買うてきた子のほうがええかもしれんのう。」

とはなしはもとにもどってしまいました。

光男と正美と三郎は、分教場にちかい岩のかけにあつまって、夜のふけるまでしんばいしました。

「民治は死んでしもうで。たすけてやることもでけんしろう。」

「あの家では、なにもくいものをやらんのか。」

「ノリなどいれてやっとするらしいが、朝と夜だけじゃもの。このごろはこえもだせんようだ。」

「この島へきてから、おれはいつべんも飛行機のとぶのをみたことがないや。」

と三郎がいました。

「飛行機がきて、ピカドンをおとしたら、この島はいつべんにとけてしまうだろうなあ。」

佐々木民治は、20日ほど箱にはいって、くそ、小便にまみれて死にました。民治の死にざまをみかじこはひとりもいません。島の人たちも、それっきり死んだかじこのうわさをしなくなりしました。

7月になりました。旧のお盆の日は、かじこたちも朝からしごとをやすみました。こんな日が1年に1どか2どありまあした。

島の人たちは、夜のふけるまで、灯籠ながしをし、かじこたちは、岩のかけにかたまって、それとおくからながめていました。3人のかじこと1そうの舟が、忍島をぬけだしたことに気のついた人はひとりもいませんでした。

灯籠ながしの夜は、かぎをかけない小舟が、なんそうも浜へのりすてられてあります。なん年も島でくらし、それをしっている石原光男は、いまではおとなのようにたくましくなった三郎をさそいました。耳のわるい正美もさそいました。

夏の朝はやく、本州のある港町のおまわりさんが、病人のようにふらふらした3人の少年をたすけて、駐在所へつれていきました。きけば、ひとばんじゅうろをおしつづけて、忍島の沖のうず潮をのりきってきたというのです。3人の少年は駐在所の土間へなきくずれ、いつまでもなきやみませんでした。おまわりさんは、ひとりの少年のふところから、ちいさいハーモニカがころがりだしたのをみつけて、それを机の上におくと、

「はやく、朝めしてもつくってやれや。」

と、おくさんにいいつけました。

瀬戸の忍島が日本じゅうにしれわたったのは、このときからでした。

## なぜ児童憲章がつくられたか

ある日、とつぜん、県庁の人、警察の署長、労働基準局の人、新聞記者などが、そろそろと浜へおりたちました。忍島の人たちはびっくりしました。こんな人たちが、そろって島へきたのははじめてでした。おまけに、「民主主義」だとか、「人権」だとか、「労働基準法」だとか「人身売買」だとかと、きいたこともないことばがとびだすので、なおさらめんくらってしまいました。

「かじこがひとり死にました。じゃけん、駐在さんがきたとき、とどけてありますがのう。なに？

わしらがかじこをいじめた？ そんなばかな。はなしが大げさすぎますのう。」

「あたらしい規則ができたちゅうなら、それをおしえてくれにゃこまりますがな。わしらは、100年もまえからこうしてくらしをたてておりますのう。」

「そうですとも。びんぼうはしとりますが、この島は、波風もたてずに、おだやかにやってきま

したんじゃ。」

親方やおかみさんは不服そうに、そっぽをむきました。けれども、そうでない人たちもいました。

「ふるいかんがえは通用せんよ。民主主義じゃ。島のやりかたをあらためねばならんと。」

1951年（昭和26年）になって、また5人のかじこが夜の瀬戸内の海をにげてきました。国会でもようやくこのことで会議をひらくことにまりました。この年の5月5日には児童憲章もうまれました。これは憲法にしたがって、子どものしあわせのためにつくられたやくそくことです。

児童憲章は、

児童は、人として尊ばれる

児童は、社会の1員として重んぜられる

児童は、よい環境の中で育てられる

とまえおきをして12か条をさだめたものです。

憲法も、国民ひとりひとりの生命や、自由や、しあわせをもとめる権利をたいせつにしなければならぬとさだめています。

「婦人や子どもの売り買いをしてはならない。」

と世界の国くにでとりきめた条約もあります。

憲法も、児童憲章も、文字だけではどうにもなりません。それにそわないものの原因をつきとめ、とりのそぎ、やくそくどおりの世のなかをつくりだすために、国民ひとりひとりがちからをあわせなければなりません。それは忍島のかじこのことだけではないのです。



1987年度瀬戸中学校3年B組 校内陸上大会



# 1988年度文部省指定道徳教育研究推進校・公開授業の記録（瀬戸中学校3年B組）

主 題 「すばらしい集団を求めて」

1988年6月30日（木）

資 料 「瀬戸のかじこ」（栗栖良夫）

授業者 森 口 健 司

T 1: 4月の出会いより、朝の学活、帰りの学活、社会科の授業、道徳の授業を通して、人間としていかに生きるか。生きることの意味をみんなと一緒に勉強してきました。朝、教室へ来ると、教室に掲げてある峠の旗（学級旗）が、先生の目に鮮やかに写ってきます。みんなが図案を考え、作った旗が、先生の闘志をかりたててくれて、「今日も頑張るぞ!」という決意が湧き起こってきます。みんなと一緒に勉強し、みんなのすばらしさに励まされ、3ヶ月が過ぎたと思います。今日、「瀬戸のかじこ」の授業をするにあたって、もう一度、みんなと頑張ってきた営みを振り返ってみたいと思います。「大きな喪失に耐えてのみ新しい世界が開ける」と1年間の歩むべき道を示してくれた詩「峠」の学習を思い返してみたいと思います。今、詩「峠」の一節一節を思い返して、みんなの心の中に浮かんでくることを発表してください。

江谷(男)「峠」の学習は、僕のこれからの人生をどのようにするべきかを決意させてくれたものでした。3年になって、高校入試という大きな峠をひかえて、頑張っていかなければならないということを感じさせてくれたものでした。

荒木(女)私は「峠」の詩のように、誠実に生きられる人間になりたいと思います。まず、人の気持ちができることができ、何に対しても、一生懸命に頑張ることができる人間になりたいと思います。そのために、残っている中学3年というときをみんなと共に学んでいきたいと思いません。決して、「一人で」という孤立した考え方でなく、「みんなで一緒に」をモットーにして頑張りたいと思います。

小野(男)1年間にいくつもの峠があると思うけど、その一つ一つを確実に越えていき、最後には、大きな険しい峠も確実に越えるような実力と自信をつけていきたいと思っています。

T 2: 一日一日が滑走ですね。大きく飛び上がって峠を越えていくための滑走ですね。その大いなる力をみんなですべてつけていく。それが学ぶことの意味ですね。

二川(男)「峠」の詩は、みんなに取って掛け替えないものだとは僕は思います。峠を越えると、また、あらたな峠があり、その峠を越えることにより、段々と成長していくということを学びました。峠は3Bの象徴だと思います。

森(女)峠というのは、いろいろな面での峠があると思います。テスト、部活動などと、その他にも一杯あると思います。先生も言っていたけど、峠というものはみんなで乗り越えていくものだと思います。みんなでというのは、「自分だけが……」という考えをなくしていかなければならないと思います。みんなでというのはすばらしいことだと思います。この3Bのみんなで力を合わせて1年間の日々を一生懸命生きていきたいと思っています。

T 3: みんなで苦しみながらも頑張っていく3年B組の象徴として詩「峠」の学習があったと思います。今日は、みんなで頑張っていく3年B組という集団を資料「瀬戸のかじこ」に寄せて考えていきたいと思っています。すばらしい集団とは何かということ「瀬戸のかじこ」に寄せて考えていきたいと思っています。資料をみんなと一緒に読んでいく中で、何とも言いえない思いが、みんな自身の中に湧き起こってきたと思います。資料に出てくる忍島という社会集団を通して、私たちの生き方、私たちの学級という集団を考えてみたいと思います。まず、忍島を考えていく中で、村田正美という少年をじっくり思い返してみてください……。村田正美という少年で

すね。何人かのかじこがいましたが、そのかじこの中でも、正美という少年は、ちょっと状況が違いましたね。ほとんどのかじこは、かじこという仕事がどのようなものであるか知らなくて、騙されて忍島へ連れて来られました。しかし、正美はかじこという仕事が、どんなものであるかを知っていて、かじこになった。その正美に寄せて、みんなの感じたこと、考えたことを発表してください。

吉成(男)正美は、家の貧しさをよく知っていたから、はじめは、いやと言っていたけど、家のことを考えてかじこになったんだあとだと思います。正美は、すごく家のことを思っていたんだなと思いました。

島(女)正美は、耳が不自由だからといって、もう人生は決まってしまったかのようにあきらめてしまっています。夢をもっていけば、それを目標にして、つらいことでも耐えられるし、頑張ろうという気持ちにもなれるのに、あきらめてしまったらそこで終わりだと思います。周りの人からダメな子と言われたりしたら、その子は伸びていけなくなることがわかりました。

金沢(女)正美は耳が悪いと言っても、他に何かすばらしいところがあると思いました。「かじこでいい」と言ったけど、本当はそんなこと言いたくなかったと思います。かじこでいいと言った時の正美のつらい思いがよくわかります。

平松(女)「正美は耳が悪い。だからかじこしかできない！」それは決めつけです。決めつけは人をダメにします。決めつけられ、枠にはめられ、自分はこうなんだと思いきまされたら、あらゆる可能性が摘み取られてしまいます。正美は可能性を奪われた人間の典型だと思います。

T 4: 家族のことを思い、兄弟のことを思う。そんな優しい少年がよりいっそう可能性を奪われて、「俺はかじこでいい。夢もない、このままでいい。迷惑かけるけん・・・」という。あの優しい少年が幸せになれない。どん底に落とされていく。お前はだめだと決めつけられ、決定的なところでまで、落とされていく。忍島という集団に怒りがあります。人間のあらゆる可能性、微かな可能性をも奪っていく忍島。「あらゆる可能性を奪っていく」ということ。これは、もう4月からずっといつてきたことです。人間とは褒められて伸びるのです。大切にされて伸びるのです。学ぶということは、みんなの持つ、すばらしい可能性に気づき、自分は頑張ったら、伸びるということがわかるということです。しかし、忍島はそうではなかった。苦しい状況におかれ、耳が聞こえにくいという優しさに溢れる少年が、よりいっそう苦しみのどん底に落とされていった。それが、忍島という集団です。

T 5: 次に考えてほしいのは、佐々木民治という少年のことです。はじめて、先生が、「瀬戸のかじこ」を読んだ時、身体が震えてきました。それは、民治の場面を読んだ時です。その時の思いは、はっきりと覚えています。「どうしてこんなことが……！」と思いました。また、これが人間の死に方かと思いました。民治の死にざまを思い返して下さい。ダンバーに押し込まれて日干しになって死んでいった。その民治の死にざま……。生命とは何だろうか。生命とはどんなものだろうか。みんなが考えている生命とは、何ですか。

西野(女)生命とは、お金や物で解決できるようなものではないと思います。簡単にあつかえないものだと思います。まして、生命は、他人に左右されるものでは絶対ないと思います。

山下(女)生命とは、自由であるものだと思います。生きることによって幸せを感じるのは、自由であるときだと思います。民治のことを読んだ時、私は、つながれている犬のことを思い出しました。散歩に行くと、思いっきり身体を動かしています。

楠(女)生きるということは、立派に生き抜くことだと思います。生まれてきたということは、立

派に生き抜くためにだと思えます。生命には限りがあります。その限りある生命をどう生き抜くかは、個人によって違いはあるけど、大切なことは、個人個人、その限りある時間を大切にしていかなければならないと思えます。

笹部(女)生命とは、最も大切なものだと思います。この世で一番大切なものだと思います。自分の親が苦しい思いをして、一生懸命生きてくれたのに、もし佐々木民治の死にざまを親が見たらどんな気持ちになるだろうと思えます。佐々木民治の生命は、忍島から捨てられたのと同じだと思いました。

T 6: この酷い死にざまを親が見たら、どんな気持ちになるだろうか。先生にも、今年の一月に子どもが生まれました。生命の誕生とは、人生最大の喜びです。酷い死に方をした民治も、生まれた時は、あんな状態ではなかったでしょう。生まれてきた時は、みんなが誕生を喜んででしょう。新しい生命の誕生をみんなが、心から喜んででしょう。しかし、あんな死にざまに追い込まれていった。忍島という集団は、生命までも奪っていく。忍島の異常さ……。人間というものを生命というものを完全に消失させる。何がそこまで追い込んでいったのか。何がダンペーに入れ、日干しにさせていったのかを考えてください。

仁木(男)僕は、始めは親方のよくの深さがそこまでさせたんだなと思いました。でも、今は自分たちが、とり残されていることに気づかずに、さらに、かじこをしいたげていった自分の心の醜さに気づかなかったことがこのようなことになったんだと思えます。

永代(女)どうしても自分のいる立場が見えないから、平気でかじこたちをめちゃくちゃな状態に追い込んでいく。そんなめちゃくちゃが当たり前であったから、一人のかじこが死んでも良心のかけらも、なくなってしまったのだと思えます。

佐々木(女)自分がよかったらいい。自分の家だけ、貧乏にならなかつたらいい。忍島の人たちは、そう考えていたと思えます。

T 7: 自分だけがよかったらいい。50数戸の家。それが力を合わせて、船を漕ぎ出したのではない。資料の44ページのところでですね。3行目のところでですね。58戸の漁師が、競争で舟を出した。自分の家が一匹でも多く鯛を釣ることしか考えない。その中でよりいっそうかじこを虐げていく。よりひどくかじこを虐げていくわけですね。

唐木(男)忍島に住んでいる人たちが、国から取り残されていたことに気付かず、心が狭くなって、さらに下を求める心が大きくなったのだなと思いました。

荒木(女)忍島の人たち自身が日本の国の流れから隔離されることなく、人間として大切にされていたら、かじこたちが、虐げられることはなかったように思います。「かじこだから……！」と、虐げていった。認められていない、人間らしい感情を喪失した人たちの心が、こんな事件を引き起こしてしまったんだと思えます。

T 8: この異常な状況が民治を死なせてしまった。民治をあんな酷い状態にして殺していった。そんな異常な状態を支えていったものがあるのです。何がこの異常さをつくっていったのでしょうか。異常な状態を支えたのは何か。どうして、こんな異常な集団ができたのか。異常な島になったのか。どうして、こんな人間を人間として見ない、人を人として認めることができない状態をつくっていったのか。そのことを考えて下さい。

吉成(男)忍島の人の中にも、心配そうにしている人もいたけど、島の習慣だからと、かじこを大切にしてやることはできなかつたと思えます。それは、島の人たち自身が社会の流れから取り残されて、法律とか正しいことを知らないから、異常なことが当たり前になってしまったのだと

思います。

唐木(男)忍島の人々は、自分が人間として何をやっているのか、わかっていないのだろうと思いました。そうなったのも、自分のおかれている状況がわからないまま、自分だけ良かったらという考えで生活していたからだと思います。

大山(男)人を死なせてしまっても、さほど抵抗を感じないことが不思議でたまらない。人間性を完全に失っていると思いました。また、それ以上にそこまで追い込んで何とも思わないようになってしまった忍島の人たちの中にある習慣が怖いと思いました。

島(女)今までの古い考え方で、かじこをものとしか思わなかったのだと思います。悪いとわかっ  
ていてもそれをやめることができない。周りの環境に流されていたから、いつまでも悪い習慣を引きずっていたのだと思います。

T 9: 自分たちが、どんな状況で生活しているのか。また、自分たちは社会から切り離されてきたという、自分のおかれている状況が見えない。その中で自分だけが良かったらという考え  
しか起こらない。それがこんな異常な世界を異常な状況をつくっていった。そして、こんな異常な状況から忍島を変えていく原動力になった行動がありましたね。それが、忍島を逃げ出した3人の少年の行動です。この3人の行動がやがて忍島を変えていく原動力となっていく  
きます。この3人の行動を引き起こさせたものは何か。それを考えてみて下さい。

小野(男)僕たちは、人間だという気持ちがあったからだだと思います。同じ人間なのにどうして青竹で、たたか  
なければならぬんだと思ったにちがいないと思います。それに、人間としての勇気が、このままでは人間でなくなる、人間にもどろうとこの行動を起こさせたんだと思  
います。

平松(女)民治の死と俺たちは人間だという思いだと思います。民治の死を通して民治は殺されたんだという怒り。かじこは機械じゃないという怒り。その怒りが島を抜け出していく勇気を起  
こさせたと思います。

益岡(女)3人の一人一人が自分の夢をもっていたからだだと思います。その夢が支えとなって、沖の渦潮も乗り切つて来れたのだら  
うと思います。それと、今までの苦しみから、自由に生きたいという心が人一倍強くあったから、この行動がとれたと思  
います。

江谷(男)人は大切にするものであって、民治の死を無駄にしたくないという3人の気持ちがあつたし、何よりも人間らしく生きたいという願  
いがあったからこそ、この行動がとれたと思  
います。

T 10: 人間らしく生きたい。人間というものは、生命というものは、虐げるものではない。人間らしい生き方がしたい。この異常な中で、その異常さに気づき、こんな民治の死に方をさせられるのは、人間の生き方でない。本当の人間らしい生き方がしたい。そんな人間らしい生き方がしたいという願  
いが、この異常な社会集団を変えていく原動力となっていく  
きます。この忍島という集団。そして、忍島を変えていった3人の行動が社会を変えていきます。この事実を見つめて、3年B組、このクラスを  
考えてみましょう。この事実を見つめて、私たちはどのように生きていくか。3年B組という集団、また、私たちはどのように生きていくのか。私  
たちは何を大事に生きていけばよいのか。3年B組、瀬戸中学校という集団の中で生きていく一人の人間として、どんな思いが大切な  
のか。どんな生き方をしているか。必要であるかを考えてほしいと思います。

三木(女)私は、忍島の出来事を知り、人間を一人一人大切に  
する生き方をしなければと思  
いまし

た。ちよつとの勇気を出せば、すぐに解決できる問題でも、その勇気が出せないばかりに解決できない時があります。私たちのクラスをみんなで協力して困難を解決していくことのできるクラスにしていきたいと思いました。

三原(女)「瀬戸のかじこ」を学習して、私は、私たちのクラス3Bを本当に3Bになれてよかったと思うクラスにしたいと思いました。みんなが協力していくことのできる、仲間を大切にしていこうことのできるクラスにしたいと思います。

楠(女)「瀬戸のかじこ」を学習して、私は、私たちのクラスを、みんながみんなの優しさに支えられ、みんなの強い心に支えられながら、仲よく過ごせる集団にしたいと思いました。

T11: 優しさに支えられた。これは、ずっと話してきましたね。強いということは優しいということですね。優しい人は強い。強い人は優しい。優しい先輩になれ、優しい人になれ、優しさに支えられる、優しさで支える人間になってほしい。それがすばらしい集団をつくっていく、すばらしいクラスをつくっていく原動力になりますね。

平松(女)私たちは人間です。人間として生まれた以上は人間として最高の生き方がしたいと思います。人間として最高の生き方とは、人を支えることができる生き方だと思います。みんなで仲間を支えるということ大切にしながら、私たちのクラスを明るく、楽しい、ここにいたら心がなごむようなところにしたいと思います。

仁木(男)僕はこのむごい事実を知って、人間は上から虐げられると、さらに下のものを虐げるといふ醜さを持っているということがよくわかりました。僕は、僕たちの学校やクラスには、上もつぐらない、下もつぐらない、みんなが協力して一つ一つを解決して行くことのできる集団にしたいと思いました。

山下(男)これからも、こんな悲しい事実をしっかりと勉強していきたいと思います。そして、その中で、このクラスをみんなで怒りの涙を流し合う集団にしていきたいと思います。

T12: 好きな言葉にこんな言葉があります。「優しさは怒りの中に培われる」村崎一正という人の言葉です。人として許せないという怒り。それが優しさなのです。人間としての強さなのです。みんなと後十ヶ月近く卒業という人生の大きな峠に向かって生きることを生きることを意味を勉強していきます。その中で本当に怒りの涙を流しながら、奥歯を噛みしめながら、誠実に生きたい。心一つにしながら頑張っていきたい。共感と連帯の絆を大切に生きたい。それが私たちの生きることの意味だと考えます。

小野(男)自分の気持ちをもっと素直に、正しいことは正しい。悪いことは悪いと言える強い意志と、人間らしく生きていくためにさまざまな困難に立ち向かっていく勇気を持つ人間になっていきたいと思います。

T13: 強い意志ですね。間違っていることは間違っている。正しいことは正しい。一つ覚えておいてください。みんなが生活していく中で、約束を守るだけが能でない。間違っていることは間違っている。それはおかしいと訴える。そんな勇気がいると思うのです。それがお互いがよくなっていくお互いが伸びていく道筋だと思います。

大山(男)忍島のように、人を虐げることにより、友達との関係が保たれる関係であってはいけないと思います。みんなが学校生活を楽しめるクラスにして行かなければいけないと思います。

T14: 「自分以下を求める心」という資料を勉強した時に、森内さんがこんなことを生活ノートに書いてくれました。『小学校へ転校してきた時、ひどくいじめられている子がいた。私も、前の学校ではいじめられていた。その時、私はその子をいじめることにより、私はもういじめ

られないと思い、他の子と一緒にいじめていった。今、振り返ってみると、私は自分より下の子がほしかった。自分よりもっといじめられる子がほしかった。自分以下を求める心を学び、今までの自分の弱さ、自分の醜さがはっきり見えます。』人を虐げることによって、人をいじめることによって、自分たちの幸せが成立する。それは民主主義ではないですね。社会科の授業でも勉強してきましたね。民主主義とは何か……。それはみんなが大切にされるということですね。みんなが認められるということです。落ちこぼれないということです。すべての人間が、生命あるものとして生まれてきてよかったと思えるような世の中……。それが民主主義の世の中です。それを目指していく。みんなで幸せをつかむ、みんなが幸せになっていくそんなクラスをつくる。山下君の言葉を借りたら、共感と連帯のあるクラスをつくっていくということですね。

樺山(男)人は大事にするものだと思います。また、大事にして、大事にされるものだと思います。人は、絶対に軽く見てはいけないと思います。人を責めるのは簡単です。でも、その人の心を動かすのは難しいと思います。僕は「瀬戸のかじこ」を心の支えに、人を大切にしていって、誠実な生き方をしていきたいと思います。

T15：私たちは多くの人に支えられて生きている。人は虐げるものにあらず、人は認めるものです。人は大事にするものです。それをその人の一面をとらえて「あれはこうだ！あの子はこうだ！あいつはこうだ！」と、人を責めていくのは簡単です。しかし、欠点をいくら責めても、その人は心を開いてくれない。その人は変わらない。そして、自分を認めてくれることもない。人というのは大事にしていく。人というのは認めていく。その中で、その人自身が自分のためなところに気づき、だめなところを自分でなおそうとする。そして、よりよい生き方を求めようとするのです。教育とは、すばらしいところを伸ばしていくものです。すばらしいところを精一杯伸ばしていくことによって、駄目な部分に気づき、この点は、私は駄目だと、だから頑張っていかなければならないと、自分で自分を変えていこうとする力をつけていく。それが人を認めていく仲間を大事にしていく営みのすばらしさであり、絶対に必要なところなんです。これからみんなが何十年生きていく中で、これから出会う人を大事にしてください。その人たちは必ずあなたたちを大事にしてくれます。しかし、その見返りは求めません。そんな思いやりと思いやり、心と心が通い合って、人間の社会というものが、人間の集団というものが、よりすばらしい集団になっていくのです。今、樺山君が「瀬戸のかじこを心の支えに誠実に生きていく」と言った。人間は失敗します。しかし、自分を見つめ直して、よりよく生きようとする姿勢が大切だと思うのです。「峠」の詩があるように、「瀬戸のかじこ」というこの資料を私たちの心の糧にしなが、人間としてよりよく生きることを求めていく1年間の営みを続けていきたいと思います。

荒木(女)忍島の規律を繰り返すようなことをしてはいけません。でも、決して、忘れてはいけないと思います。この出来事を通して、法律ができたけど、それを簡単に考えてはいけないと思います。この法律を生かして行くために、まず、人間同志が認め合い、信じ合っていく心を育てなければなりません。

T16：認め合い、信じ合っていく。共感と連帯です。みんなで苦しみを分かち合いながら、仲間の苦しみや悲しみをみんなで幸せに変えていく共感と連帯……。その中でみんなのよりよい生き方を考えていきたいと思うのです。

T17：最後に中間テストが終了して、数日後に書かれた枝川さんの生活ノートの一節をみんなに

紹介します。この中に秘められたみんなで頑張っていこうとする生き方、仲間に支えられ仲間を支えようとする生き方をみんなの心に刻んで下さい。『私は今、特に仲のいい友達が二人います。友達は、いつも、私を励ましてくれます。この前の中間テストの時も、夜すごく眠たかったけど、友達もみんな頑張って勉強しているのにと感じて頑張りました。その結果、私にとっては、今までで一番いい成績でした。眠いのを我慢して良かったなあと思いました。お母さんが、「やればできるね」と言って、とても喜んでくれました。「友達っていいね。心の支えだね。大人になってもずっと親友でいられたらいいのにね」とお母さんは言います。また、私は学校であったことの楽しいことも、嫌なことも、よくお母さんに話をします。小学校のころ、嫌なことがあったことを話すと、お母さんは、「優しい子になってね。自分が言われて嫌だなあと思ったことは、人に言ったりしないように」と、いつも話してくれたことを思い出します。私自身、思いやりのある優しい大人になれるように努力していきたいと思っています。』私たちは、一人では生きていけません。仲間がいるから、クラスみんながいるから、つらいときに頑張っていける。人間というものは、支え合い認め合い大切にしようというものです。中学3年という残された日々をみんなで共感と連帯の絆を大切にしながら頑張っていきたい。頑張っていこう。そう決意させてくれたのは、「瀬戸のかじこ」だったと思います。樺山君の言葉を繰り返します。「瀬戸のかじこ」を心の支えに誠実に生きていく。みんなで精一杯に頑張っていきましょう。それが3年B組という集団がよりすばらしい集団になっていく道だと考えます。



1988年度瀬戸中学校3年B組 校内陸上大会